

## コロナ渦における重度・重複障害児の教育

本講義において重度・重複障害児における教育には手話や体をふれあい感覚を共有するという行為は大切なことであることを学習した。特に盲ろう者に対しては教師の手話を手で触って理解する場面などで体が触れ合う機会が多いと感じた。コロナ渦ではそのような接触が感染につながることを懸念されるため、コロナ渦が縮小してはいるものの新しい生活様式の登場における重度・重複障害児教育における対策についてまとめました。まず、教師と子どもの接触について文部科学省は以下のような対策を挙げている。

(教職員と児童生徒等の接触によるリスクの低減)・教職員は児童生徒等に触れる前後に手洗い(手指消毒)を行い、可能な場合は担当者を固定し、教職員が複数の児童生徒等に触れないようにするとともに、児童生徒等が触れる教職員も限定する。その際、固定や限定が相互のストレスにならないよう、必要に応じて一定期間でローテーションするなどの工夫も考慮する。児童生徒等の実態によっては、教職員がマスクに加えアイシールドやフェイスシールドを併用して指導に当たる。校外の指導者を受け入れて指導を行う場合は、校外指導者の検温、手洗い、マスク着用等も徹底し、使用する教室を限定し、可能な場合は在校時間を短くする。

前述した対策は通常学級のある学校でも取り組まれている対策と共通点が多いが担当する教員を制限することは念入りの対策がされていると感じた。また重複障害児は健常者に比べて感覚過敏によりマスク着用を拒む児童も見受けられていることがわかった。マスクの対策について本人に合った素材のマスクを使うなどの配慮が行われている。

[新型コロナ 重度障害、対策に苦悩 マスク嫌がる／大声を出す 北九州・小倉の施設、入所者・職員4割感染 | 毎日新聞 \(mainichi.jp\)](#)

感染対策が行われる教育方法としてオンライン学習が効果的であるが ICT を活用した重度・重複障害生徒のベッドサイド学習も感染対策として用いてもよいと考えました。これは ICT を活用した疑似体験型学習をすることができる方法です。この方法を用いれば外出による感染を防ぐことができるうえ、寝たきり状態の重度・重複障害児に対する体験学習として今後活用できると思いました。

[j20012.pdf \(naruto-u.ac.jp\)](#)